



KAAT 神奈川芸術劇場芸術監督トーク
『SHIRAI's CAFÉ』 Vol.8

2019年11月9日(土)
KAAT 神奈川芸術劇場
1F アトリウム

芸術監督：白井晃（演出家・俳優）
ゲスト：和田永（アーティスト/ミュージシャン）

KAAT 神奈川芸術劇場・白井晃芸術監督が、演劇や音楽のことをゲストのミュージシャンと語り合う企画。第8弾のゲストは、オープンリール式テープレコーダーを楽器として演奏する音楽グループ「Open Reel Ensemble」を主宰するミュージシャンの和田永さん。2015年からは古い電化製品を電子楽器として蘇生させ、オーケストラを形づくっていくプロジェクトを始動させ、その成果により第68回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞しています。2016年に上演された煤図かずおさん原作のミュージカル「わたしは真悟」でクリエイター同士として出会って以来、3年半ぶりの共演となり、数々の興味深いお話が湧き出る会となりました。



『SHIRAI's CAFÉ』の会場は KAAT 神奈川芸術劇場エントランスに広がる 1F アトリウムです。今回会場には、4 台のテレビ画面が客席に向かって並んでいました。そこに和田さんが登場するや、いきなりの「ブラウン管ドラム」パフォーマンス。ブラウン管からぴょんぴょんと跳ねるような音が発せられ、リズムカルに奏でられます。その後、お客様 2 人と白井監督を舞台へと呼び込み、何やら耳打ちをし、彼らが和田さんにタッチすると「ビュン！」という大きな電子音が発せられます。啞然とする監督がやっと発した言葉が「意味が分からない！」

そこから和田さんの丁寧な解説が始まります。「ブラウン管から出る静電気を体で拾っています。靴下の中にコイルを仕込み、それをアンプにつなげることで音を鳴らします。今世の中に多く流通する液晶テレビでは出来なくて、静電気を放出している古いブラウン管だからこそ出来る技です。そして、ブラウン管の縞模様にも意味があります。本数が多ければ高い音が出て、逆に少ないと音が低くなります。」どのような音がどの映像を映した時に出てくるのかを黙々と研究し、自らを「半分家電フェチ」と称する和田さん。遂には「古い家電は近未来的な音を発するが、自分が試していることは、超アナログの作業。廃棄処分されていく家電は、過去という異国からやってきた新しい民族楽器みたいなもの」と言い切る和田さん。



以前、古い壊れたオープンリールを手で回した時この世のものとは思えない音が出て、「過去という異国からやってきた民族楽器の音にも通ずる

エキゾチズムを感じた」と言います。

2015年からオープンリールだけでなく、都会の廃棄物となったあらゆる電化製品を楽器として蘇生させるプロジェクトを始めています。様々な電化製品を近所の方々からの寄付を募り、エンジニアやデザイナーを集め、様々な電化製品を楽器化しました。黒電話でリズムマシンを作ったり、扇風機でギターのような楽器を作ったりしています。そして家電楽器のみで演奏するバンドも生まれてきました。2011年にテレビが地上デジタル化された時、大量の廃棄ブラウン管が出回り「ブラウン管のガムランアンサンブルが出来るのでは」と脳内でひらめき、22台のブラウン管でアンサンブルするという企画を実現させたのだそうです。



ここで、白井監督の純粋な疑問が和田さんにぶつけられます。「そもそも何故音になるのか？」和田さんの回答は、実に単純明快で分かりやすいものでした。「テレビには映像と音声の端子があります。それは同じコネクタ形状で、間違えて音声端子と映像端子を逆に差すと、画面に縞模様が出てくことを発見しました。という事は逆に、縞から音が出てくるのでは、と考えたのです。そして縞を映したブラウン管の静電気を拾うと音になることを見つけました。今から縞をビデオカメラで写し、その映像を音端子に差し込むと音が出てくるという試みを行います。」そんな事をよく思いつくものだと変に感心する白井監督を横目に、和田さんがカメラの前に縞模様をかざすと、音が出てきます。縞模様の本数で音も変わると和田さんは、ボーダーシャツからも音が出てくるといながら、その場で、手際よく着替えます。カメラから離れると高い音程となり、近づくと低い音程になり、震えるとビブラートがかかります。そして音階と距離感の感覚を掴み、ベートーヴェンの第九「歓びの歌」の即興演奏が始まりました。

お客様からもボーダーシャツを着ている方を募って実験演奏を試みたところ、何と今日は白井監督もボーダーを着ていると言い出しおもむろに上着を脱ぎ始めます。一人ずつカメラに近づいたり遠ざかったりすると、実に多様な音程が発せられます。体を震えさせると、ビブラート音になります。リズムに乗って体を動かす参加者の皆さんも楽しそうです。

そして最後に会場にいる全員が参加しての試み「通電の儀」が始まります。ブラウン管の静電気をみんなの体に通して、音を鳴らすという挑戦です。参加者みんなで大きな円を作り、手をつなぎます。そして1人がコイルを持ち、和田さんが通電スイッチを押すと音が出る、、、はずなのですが、実際に試してみてもうまくいきません。人数が多すぎるからかなと首を捻りながら、1人1人の手が繋がっているかを確認する和田さん。ノイズが発生しており、床に電気が逃げているのではと原因を突き止め、全員に片足を上げてもらいますが、それでもうまくいきません。しばしその場で考える和田さんがひらめいたアイディアは、手を強く握って全員でジャンプすることでした。そうすれば地面に電気が逃げないのではないかと。みんな強く手を握り、「せえのー」の掛け声でジャンプすると、その瞬間、「びゅん」という音が鳴りました。最後は白井監督の音頭で、三本連続ジャンプで締め、皆様の多大なるご協力をいただきながら、盛大な拍手で無事に終了する事が出来ました。

撮影：新江周平

